

た。

私はまた幸いにして他の御用船に助けられ、無事横須賀港にはいった。救助された兵隊は一週間ほど横須賀海浜団に仮入隊し、各所属部隊に帰団することになった。我々呉所属は十人ほどであった。汽車に三日間乗り、はじめて皆気楽に話合い呉海浜団に全員無事到着し、帰団の報告をした。

私のおもな苦勞はとくに艦船中であつた。その後、終戦までの苦勞も、一生忘れることはないと思う。

## 北の海の回顧録

愛知県 佐久間 千鶴夫

「駆逐艦薄雲に乗艦を命ず」昭和十七年五月二十日、横須賀田浦海軍水雷学校の卒業式のことであつた。

いよいよ実戦部隊への配属に、心のときめきを覚えたものでありました。私は待望の帝国海軍の一人前の兵隊として、また、あこがれの駆逐艦乗りとして、国民の期

待を一身に受けたんだ、またその期待にこたえるんだ

と、心のなかに勝手にきめ、一人ひそかに万歳を叫んだ。心は、ときめき、胸踊らせ、勇躍舞鶴へと向かいました。

ところが、この駆逐艦「薄雲」は期待に反して、現在新装備をするためさう中で、まだまだ軍艦とはとてもいえないしろものであつた。舞鶴海軍工廠の岸壁にせつがんされ、鉄びょう打ちのけたたましい音と、酸素溶接の青白い光のなか、即、戦力として戦列に加わるべく、日夜その整備をかさねているさい中であつた。

昭和十七年七月三十一日、第五艦隊（旗艦・巡洋艦「那智」）に編入、のちに昭和十八年四月一日付で第九駆逐隊編入となるが、昭和十七年八月五日、いよいよ待望の舞鶴港を出港して実戦配備につく日が来た。

日本海を進路北にとり「両舷前進ヨソロー」と、大湊港に向かつて出港した。途中、艦の戦速測定検査等々多くの諸実験検査を実施し入港した。それは、昭和十七年八月十一日、北太平洋における特殊勤務につくための出港でした。

いよいよ昭和十七年八月十一日大湊を出撃し、勤務地

の日本最北端・占守島の幌筵湾を基地に、北太平洋方面の作戦行動につき、昭和十八年五月三日の発病まで、この間約八か月有余、同艦の第二発射管要員として任務につく。

このかん、北太平洋並びにオホーツク海はとくゆうの悪天候で、真に言語に絶し、筆舌では現すことの出来ぬものでした。

くる日もくる日も「ハッチ」をしめたまま、居住区(約三十平方メートル)に三個班、三十五、六人がこもり、嘔吐と、空気の悪臭のなかの日々が続き、上甲板は荒れくるう波浪が牙をかみ、一千八百屯の艦をひと呑みにしてしまふ。

船酔いも次第にはげしく、食欲はますます減退する。しかし、三等水兵はつらい。食欲があるがなかるうが船酔いはどうであれ、毎日の日常日課は一日たりとも、おろそかにすることは出来ぬ。当然、当直・見張りは絶対欠くことは許されない。

山のような波濤の波間をぬって、分厚い防寒具で身を包み、食缶片手にロープをつたって甲板を走り、かるわ

ざのな行為で食事当番をし、上官のめんどうをみたうえ、欠くことの出来ない当直見張りである。艦橋での見張りでは、双眼鏡は海中をのぞくものかと錯覚をおこす。ググググと盛りあがって目の前が海のなか、つきからつきと押し寄せる大波、一瞬目をつむる。

操舵手は舵輪を空転さす。スクリューがくうを切ってブルルンブルルン、プロペラとなる機関の音は、ガガゴゴと身ふるいする。

沈む艦首はつきには天をも突くかと大きく突きあげる。オホーツクの冬の海は雪と氷と嵐と大波濤の、人も艦も寄せつけぬ凶暴苛酷な海だ。艦首には想像を絶する二、三メートルもの氷柱、つまりツララが出来て、船の前進をさまたげる。波の静かな日を持って決死の破柱作業、防寒具のままの作業ははかどらない。終日つづく波ろうとの戦いに精も根もつきはててしまふ。

ついに、ある日見張り要員交たいのさい、先輩の白河兵曹が波にさらわれ、第一号の犠牲者が出た。作戦行動中の、立派な名誉の戦死である。

「海ゆかば、水づくかばね、山ゆかば草むすかばね」と

まったく歌のことばの通りだ。全艦員のおもくるしい合掌のうち水葬礼をおこなった。今日でもそのときの光景は目に浮かぶ。いくにちとなくそうした状態がつづく。艦内の空気はますます悪くなる。人の心もいらだって「罰直」も多くなる。たださえ自分の体を維持するだけのところへ、そのうえの「罰直制裁」はまことに地獄の餓鬼道のようなものでした。

そうしたなか、ミッドウエー、ダッチハーバー、と大本営は威勢のよい発表が出され、国民はわいた。しかし北方海域では悪戦苦闘の毎日、アツツ島は玉砕、キスカ島は風前のともしび、戦局は日ましに悪化のみちをたどる。一方、敵艦隊攻撃、警戒、船舶護衛、キスカ島への食糧補給、この食糧補給はまさに挺身輸送であった。連日連夜、不眠不休とそれこそ体力の限界に挑戦した。今日では想像もつかないものであった。帝国海軍の軍人だと意気こんでもたしかにつらかった。

敵哨戒機「コンソリーデーテット」の大型水上艇、その哨戒域は大変なもので、彼に発見されれば空中に煙幕の輪をえがき、同時に攻撃機の要請の電波がとぶ、三十

分後には敵機の襲来となる。静浪時でもこの空中の円中を抜けることは我が駆逐艦の最大戦速三十五ノ三十七ノットでは到底無理であった。まさにキスカ島食糧補給作戦はすて身の挺身補給作戦ともなったわけです。およそ私の人生航路の一大波乱期であったと思う。のちにこのキスカ島は大東亜戦史上たぐいまれな、無血撤退となる。いずれにしても、私にとっては、現世の地獄絵図であり、回顧の念ひとしおです。

昭和十八年五月三日、ついに私もダウン、病名は肺浸潤で、その発病記録は現在保管しています。

その時の軍医、駆逐司令の所見をあげてみます。

『生来頑健にして、昭和十六年九月一日入団以来著患ヲ知ラズ。家族歴ニ徴スルモ近親者中結核性呼吸器疾患ニ罹リタル者ナシ。昭和十八年五月三日ヨリ、頭痛発汗アルニ依り、同月八日大湊海軍病院ニ送院セシメタリ。又所見としては、按ズルニ右発病ノ原因ハ、最モ非衛生的ナル環境下ニ酷寒怒濤ノ北太平洋方面ニ於テ、長期ニ

旦リ激烈ナル作戦任務ニ従事し、献身的精勵恪勤ノ結果、不知不識ノ間ニ重積セル過勞ニ因リ身体ノ抵抗力ヲ

失い、遂ニ発病ニ至リタルモノニシテ、全ク公務ニ起因セルモノト認ム。

右証明ス

昭和十八年五月八日

私の十八歳〜十九歳の若き青春の一頁です。

―あとがき―

大湊海軍病院転送のさい、つきそっていたいただいた軍医、また被囊を持ってくれた同僚、大変にお世話をかけました。しかしそのご、この「薄雲」は北方の海に眠ることになり、運命をともしたと思われます。

心からご冥福を祈り、涙と共にこの筆を置きます。

## 潜水中の潜水艦

愛知県 今泉 一郎

二十年大戦末期ごろ、とくにサイパン、沖縄陥落後の豊後水道から外洋への出港は、潜水艦以外は不可能であった。

二十年五月、警戒任務で数百キロ沖の太平洋を巡航、

敵機の来襲にそなえ急速潜航にそくおうできる態勢での二時間交代二直制での当直勤務である。しかも潜航時は非常ベルとともに総員配置で、睡眠不足の連続であった。

もちろん甲板に上がり外気にふれ、また太陽をみることはなく、昼夜の別も時計で知るのみである。電機の制御盤前は四十度を超える高温と熱気、兵員室は天井から水滴の落ちるほどの湿度。汗を拭く水にも制限を受ける小さな潜水艦である。内地の漁港へ仮泊、民家の奉仕により入浴したときは、生還した思いであった。

六月、奄美大島への物資輸送作戦中、米潜から魚雷攻撃を受けたが、艦首と艦底をくぐりぬけ、さいわいにもぶじを喜んだ。その場の敵探知機をのがれるため全機停止しての無音潜航である。人の移動によるツリム調整等直接の戦闘ではないものの、日没までの長時間待機という地味な戦いながら感慨深いものがある。

大島へ入港したが米軍機のかんだんない飛来、空襲を避けるため、昼間の長時間海底へのちんぎ、潜航である。これもまた容量制限による酸素欠乏で肩で大きく呼吸す